

DNA 鑑定をめぐる外交問題

Diplomatic incident

Nature Vol.439(892)/23 February 2006



拉致被害者を特定するための DNA 鑑定をめぐる北朝鮮とのいざこざで、日本は下手なことをしている。

2月16日、北朝鮮のリーダー金正日総書記の64歳の誕生日を祝うパーティーが各地で開かれたが、近隣国であり、北朝鮮と問題の続く日本でも祝宴は開かれた。東京では、在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）が誕生日の祝宴を開いた。朝鮮総連は主に、日本が朝鮮半島を占領していた35年間に日本に強制的に連れてこられた朝鮮人の子孫によって運営されている。この日の出席者は、北朝鮮が日本に対して挙げた最近の外交的勝利に乾杯した。にわかには信じられないが、北朝鮮政府が科学的客観性の責任を引き受けてみせたのだった。

これは、北朝鮮から日本に渡された遺骨について2004年に日本国内で実施されたDNA鑑定の有効性をめぐっての問題だ。北朝鮮側は、遺骨は横田めぐみさんのものだと発表した。北朝鮮は、横田さんを1977年に日本から拉致したことを認めている。しかし日本側は、DNA鑑定の結果からその遺骨は別人のものであると主張し、横田さんの消息に関する真相を公表するよう、要求し続けている。

これに対しては、このDNA鑑定を実施した科学者が、昨年1月の*Nature*とのインタビューにおいて、検査結果が決定的なものではないことを認めている（*Nature* 433, 445; 2005 参照）。しかし、彼はその後、この件の全容を率直に語れないような状況下にある。

今こそ日本としては、DNA鑑定結果が決定的なものとする従来の主張を裏づける証拠を提出するか、あるいは決定的ではなかったことを認める必要がある。後者の場合はおそらく、火葬された遺骨にDNAが十分含まれていなかったことがその理由となるだろう。

しかし、そのような誤りを認めることを日本政府高官は体質的に嫌う。面子を失うことを恐れているのかもしれないが、それは一時的なことである。長期的にみれば、真実

を語ることで、日本の立場はより強固なものになるだろう。それに、横田さんの遺骨が火葬されたものだとする北朝鮮の主張を裏づける確かな証拠は、今のところまだないようだ。となれば日本としては、今後も北朝鮮に対し、横田さんをはじめとする数多くの日本人拉致被害者に関する信頼性の高い安否情報を提出するよう要求し続けられる。

しかし現状では、遺骨のDNA鑑定問題が、日本にとってやっかいな外交問題となっている。そして北朝鮮は、それを十二分に利用している。

「日本としては、DNA 鑑定結果が決定的なものとする従来の主張を裏づける証拠を提出するか、決定的ではなかったことを認める必要がある」

2月4日から8日にかけて行われた日朝二国間交渉の席上、北朝鮮は日本に対して、DNA鑑定を議論するための合同研究者会議を開催したいという提案をした。日本側はこの提案を拒否し、当初のDNA鑑定結果の解釈は正しいものと考えている、との主張を続けている。そのため、金総書記の誕生日パーティーに集まった賓客は、我々は確固たる科学的根拠に問う、とする態度に喜び、小躍りしているのである。「我々が望んでいるのは真実を明らかにすることだけだ。問題を科学的に解決したいのだ」と彼らはいい、心の中で笑っている。

日本の政府高官は、そのミスから学ぶ必要がある。金正日体制と対峙するためにも、日本は常に道徳的に優位な立場を確保しておかねばならない。科学データの誤った解釈に基づく公式声明は裏目に出やすい。そのような問題の存在を認めることさえ頭から否定してしまえば、問題は複雑化する方向に進み、そうなれば失うのは面子だけでなく信頼感も、ということにもなりかねない。